

# アンナという女預言者がいた

ルカによる福音書 2 : 22 - 40



司祭 ヨハネ 井田 泉

2025年2月2日

被献日

上野聖ヨハネ教会にて

今日 2 月 2 日は被献日、幼子イエスが生まれて 40 日目に、神殿で神に献げられたことを記念する日です。

幼子イエスがマリヤとヨセフに抱かれてエルサレムの神殿に連れて来られたとき、そこで二人の老人に会いました。一人はシメオンというおじいさん、もう一人はアンナというおばあさんです。今日はアンナに目を留めてみることにしましょう。

**「また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ、八十四歳になっていた。」ルカ 2:36-37**

名前はアンナ。84 歳という高齢です。短い記述ですが具体的に彼女のことが記されています。イスラエルの 12 部族の中のアシェル族に属する。お父さんの名はファヌエル。彼女が歩んできた人生について、こう記されています。

**「若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ」**た。

当時の女性は遅くとも 10 代の半ば過ぎには結婚したとされますので、夫と死に別れたのは 20 代の半ばにもならなかったと思われまます。それからおよそ 60 年を生きてきました。

当時の男性中心の社会にあっては特に、夫を失った女性の立場は非常に弱いものでした。生活がたちまち切迫したでしょう。子どもがあったとすればその養育は大変だったでしょう。死ぬ

ような辛い思いをすることが何度もあったかもしれません。そうした中で彼女はただ一つのものにすがりつきました。神さまです。神さまだけを頼りに生きてきたのです。

**「彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていた。」 2:37**

「彼女は神殿を離れず」とあります。実際にエルサレム神殿の一角に暮らしたのか、それとも連日神殿に行って祈りを捧げたということか。それはともかく、夫が亡くなって以降アンナは、どんなことがあっても神さまから離れず、祈って祈って、神にすがって生きてきたのです。

アンナはそうした日々を重ねる中で、神の声を聞くようになりました。聖書の言葉が立ち上がって彼女に語りかけてくるのです。アンナは、自分に語りかけてこられる神の言葉を、苦しみや悲しみを抱えた人々に伝えました。それを聞いた人たちは、神からの慰めと励ましと導きを受けました。アンナをとおして神さまの声がはっきり聞こえる。それで彼女は、預言者と呼ばれるようになったのです。

**「そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。」 2:38**

アンナは今日も祈るために神殿に来ました。そしてそのとき、幼子イエスと出会いました。彼女にははっきりとわかった。こ

の幼子が、聖書に約束された救い主、自分たちが待ち望んできた方であると。彼女の心は喜びに溢れました。神を賛美せずにはおれませんでした。そうして、神の救いを待ち望んでいるエルサレムの人々皆に、この幼子のことを話したのです。

ここで、このアンナのことから思い浮かぶ一人の女の人のことをお話ししたいと思います。今からもう 38 年も前の 1987 年、わたしは聖公会神学院の教員をしていて、神学生たちと一緒に約 2 週間の韓国研修旅行に行きました。合わせて 20 数名だったのでしょうか。ある日、ソウルから南へ 3 時間くらいのところにある小さな農村、<sup>チェアム</sup>堤岩というところを訪ねました。そこで一人の高齢の女性に出会いました。<sup>チョンドンネ</sup>田同禮さん。90 歳近い方で、その堤岩教会の長老をされていました。

田同禮さんは 16 歳のときに結婚して、その堤岩に暮らすようになりました。当時この村は 30 戸余りの小さな農村で、ほとんどがクリスチャン。村の真ん中に教会がありました。彼女は 23 歳のとき、夫と死に別れました。「若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ」というアンナとまったく同じです。何があったか。それを当時の堤岩教会の<sup>カンシンボム</sup>姜信範牧師が話してくださいました。

時代は日本が朝鮮を植民地支配していたとき、今から 100 年あまり前です。<sup>チョンドンネ</sup>田同禮さんが結婚して 7 年目の 1919 年 4 月 15

日（火）、日本の警察が、話があるからと言って、村の 15 歳以上の男性は全員教会に集まるように命じました。田同禮さんの夫、<sup>アンチンスン</sup>安珍淳さんも行きました。集まったのは 20 数名。警察駐在所長の話の後、しばらく待つように言われました。やがて教会の中に集まっていた人々は、自分たちが閉じ込められたことに気がつきました。藁ぶきの礼拝堂に火が付けられました。日本の憲兵約 30 名が包囲していました。窓から脱出しようとした人は銃剣で撃たれ、突き殺されました。こうして、ここで殺されたのは 23 名。田同禮さんの夫も殺されました。午後 2 時のことでした。やがて村じゅうの家が日本軍によって火を付けられました。堤岩の村は全焼、全滅。生き残った人々は山に逃げました。この虐殺事件は、当時盛んであった独立運動に対する報復として行われたものといわれます。

しばらくたって現場が発掘されたとき、黒こげの遺骸がひと塊りになっていたそうです。お互いに抱き合うようにして、祈りながら死んでいったのだらうということでした。

生き残ったほとんどの人々は教会から離れました。<sup>チェアム</sup>堤岩は「イエスを信じて滅びた村」と世間では言われました。夫を失った田同禮さんは、二人の小さい子どもとともに、礼拝を守り続けました。毎日毎日ずっと、あの事件のあった午後 2 時に、あの教会のあった場所に行って、祈り続けたそうです。ここで殺された自分の夫のこと、村の親しい人たちのことを記憶して祈

った。イエスさまも十字架で殺された。けれども死んで復活された。神さま、この教会を復活させてください。村を復活させてください。

5年、10年と祈りつづけるうちに、田同禮さんの祈りは聞かれて、教会は再建されました。何度か礼拝堂は建て直され、熱心に礼拝と宣教活動を行う教会に発展しました。「イエスを信じて滅びた村」と言われた堤岩の村は、今は「イエスを信じて復活した村」「イエスを信じて祝福された村」と言われているそうです。

アンナさんと田同禮さんに共通することは何でしょうか。

どんなことがあっても、神から離れなかったということです。

**「彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていた……」**

彼女らは、神殿から、教会から、神から離れなかった。同時に、神が彼女らを離されなかった。神さまが彼女らを見捨てず、ずっと保ち支えておられたのです。

わたしたちも決意しましょう。どんなことがあっても神から離れない。アンナから離れず、アンナを見捨てられなかった神は、わたしたちを離れず、わたしたちをも見捨てられません。それですからわたしたちもまた決意したい。「わたしは神さまから決して離れません」「わたしたちは決して主イエスから離れま

せん」と。

84 歳にしてアンナは新しく主イエスに出会い、主を賛美し、この方のことを人に語り始めました。いかに年齢が進もうと、主を信じる人生は単なる残りの人生ではありません。主が新しく働きかけてくださる人生です。新しく主を賛美することを許される人生です。救いを待ち望む人々に、新しく主イエスのことを話し、一緒に喜ぶことができる人生です。

祈りましょう。

主なる神さま、かつてアンナは苦しみの中であなたから離れませんでした。あなたご自身が、彼女をかたく保っておられました。わたしたちもまたあなたから離れることがないように、わたしたちをあなたのもとに保ってください。わたしたちもまたアンナとともに、主イエスをはっきりと知り、主を賛美し、主を語り伝える——そのような幸いをわたしたちにも与えてください。主のみ名によってお願いいたします。アーメン